

昭和月 S P レコードで辿れば

戦前の宝塚レビュー

S P レコード収集家■城内 實

(一)

連載も二十数回続くとテーマを決めるのに結構苦勞するものである。書きたいテーマはまだまだ山ほどあるのだが、どれも書いて良いか分からなくなってくる。そういう時はたいていその季節に一番相応しいテーマを選ぶようにしている。

そこで今は梅の時期であるから、「梅と兵隊」という曲でもとりあげるかなと考えた。ところが、この「梅と兵隊」(結構有名な曲である)、もともとは一世を風靡した火野葦平の実戦手記を題材にした「麦と兵隊」(東海林太郎唄)に続く「〇〇と兵隊」ものであり、この「兵隊シリーズ」について語りだしたら「石と兵隊」、「煙草と兵隊」、

「花と兵隊」、「密林と兵隊」と延々とどまるところを知らない。したがって、紙幅の都合上別の機会に譲ることにした。

そのようなわけで「〇〇と兵隊」はやめて、今回のテーマをどうするか考えあぐねていた矢先、宝塚音楽学校第八十八期の卒業式が行われたという新聞記事を目にした。

筆者は戦前の宝塚や松竹歌劇(所謂SKD)のレコードを特に熱心に収集しているわけではないが、いつのまにか何枚か所有するようになり、それらが結構好きでたまに聴いている。そこで今回は卒業式にちなんで宝塚をテーマにすることにした。

(二)

宝塚音楽学校の前身、宝塚唱

歌隊が発足したのは大正二年七月、宝塚歌劇の初演に先立つこと約九ヶ月のことである。もともと宝塚唱歌隊は阪急電鉄の小林一三翁が「地元宝塚温泉に娯楽」という発想で設立したものである。どんな時代にも先駆者がいるものである。

宝塚歌劇団の団員は皆この宝塚音楽学校卒業生であり、これまで約四千人がここから歌劇の世界へと巣立っている。

筆者が所有している宝塚のSPレコードで一番古いのはニッポンホンの「めくらと象」とニッポトの「アミナの死」で、いずれも大正時代の吹き込みである。それだけに音質も悪く、曲自体もどこか安っぽい。ところがそれに比べて昭和に入ってから宝塚盤は大変あか

抜けていて今聞いても十分に味わえるものである。特に橘薫、三浦時子の二大スター全盛時代のものが一番良い。

昨年産経新聞の「日本人の軌跡」で白井鐵造の連載があったので覚えている方もあるかと思うが、白井は宝塚の恩師岸田辰彌の「モン・パリ」に感銘を受け、パリに本場のレビューを研究しに行つて花開いた人物である。橘と三浦がスターダムにのし上がるきっかけとなったのが、この白井の昭和五年八月の帰朝記念レビュー「パリゼット」であつた。

その中の「すみれの花咲く頃」は戦前の宝塚の代表作のように言われている。原曲はシャソン歌手ジャン・ソルビエが歌う「LES LILAS」である。

「パリゼット」には他に「ディガ・ディガ・ドウ」という曲がある。これも原曲は黒人グループ歌手のミルス・ブラザースが米国ブラウンズウィックに吹き込んで大当たりした曲である(日本では当時ラッキーレコー

ドからミルス・ブラザーズの盤が発売されている。

このように当時の宝塚はシャソンやジャズをふんだんに取り入れ、より洗練されたレビュを立って続けに発表していったのであった。

(三)

筆者が所有している宝塚レコードの中で一番良く出来ているのが、ポリドールから昭和六年九月に五枚組で発売された「ローズ・パリ」のレビュ盤である。この白井鐵造のレビュは「パリゼット」から一年経ちさらに磨きがかかっている。レコードは白井鐵造作詩、竹内平吉編曲で雪組生徒の合唱付きで、以下の十曲で構成されている。

- ローズ・パリ(三浦、橘)
- 算術の歌(雪野富士子、橘薫)
- モン・パパ(三浦時子)
- 愛する君(明津麗子、雪野富士子)
- 實際嫌ひ(三浦時子、橘薫)
- 愛の唄(明津麗子、雪野)
- 世界漫遊(橘薫、三浦時子)
- 私はフロッシー(明津、橘)

ドンナ・クララ(草吹美子) 只一つのバラ(草吹美子)

「モン・パパ」は当時大変流行した曲であり、古川ロッパなどがコミカルな替え歌を吹き込んでいるほどである。

なお、この「ローズ・パリ」五枚組は約十年かけて一枚づつ集め最近ようやく五枚揃った。その時の達成感はきつとSPレコード収集家でないとは分らないであろう。

(四)

戦前の宝塚の黄金時代はまさに白井鐵造によってもたらされたが、白井を中心に「パリ・ゼット」以外にも、「セニヨリータ」(オデオン、昭和六年二月)、「サルタンバンク」(ポリドール、昭和七年二月)、「シャソン・ダムール」(コロムビア、昭和七年一月)、「パリ・ニューヨーク」(パルロフォン、昭和八年二月)、「トラウンドット姫」(コロムビア、昭和九年七月)、「ミュージック・アルバ

ム」(コロムビア、昭和十一年二月)、「世界の唄」(コロムビア、昭和十二年二月)といった異国情緒あふれるレビュのレコードが発売された。

の強い歌劇が発表されるようになった。

(五)

冒頭で述べたように当時は「〇〇と兵隊」ものが流行ったが、なんと宝塚映画「女学生と兵隊」(ピクチャー、昭和十五年四月)というものまで出現した。ただ、だからといって事変以降が暗黒時代であったというわけでは決してない。確かにテーマは戦時色に染まるが、それでも当時の宝塚が若者たちにとって夢のある娯楽であったことには何ら変わりはない。(続く)

